

FDをどのようにとらえるか

学長 竹村 牧男

FDの義務化以来、本学においても数々の取り組みが展開されてきていることは、大変、喜ばしいことだと思う。FD推進センターをはじめ、関係者のご尽力に厚く御礼申し上げる次第である。

FDをなぜ行うかについては、その根本理念を共有しておくことが大切であろう。法令上、義務化されたからでは、あまりにも他律的である。本学のブランド力を高めるため、というのは、間違いではないであろうが、やや抽象的である。私は、今、預かっている学生の満足度をよりいっそう高めていくためにこそ、行うものではないかと思う。学生の勉学の理解度や到達度をさらに深化させていくために、何をすべきかを真剣に考える、そこにFDの意味があるのではなかろうか。

そのことの実現のためには、カリキュラムの問題とともに、シラバスの問題もあり、授業の実践形態、成績評価の方法、等々が課題となってくる。そしてその一環に、学生にも、勉学への意欲を持ち、予習・復習に取り組むような姿勢を持ってもらうことが大切である。このことがあってはじめて満足度も云々できるわけで、FDの根本的課題の一つは、いかに学生の動機づけを実現していくかであろう。

いずれにせよ、FDへの取組の成功如何は、学生の満足度をいかに高めるかという課題を、組織をあげて真摯に共有しえているかどうかにかかっているのではなかろうか。



東洋大学におけるFD活動の現状 ～FD推進センターの活動方針と課題～

FD推進センター長 吉田 泰彦

「FD推進センター」は、教育活動の継続的な改善の推進と支援、特にFD活動の実施主体である各学部・研究科における共通理解のための全学的FD活動と、各学部・研究科のFD活動への支援を目的とし、平成20年12月1日に設置されました。

これまでの活動は、知識習得や教授法のヒントを得るための研修会や講演会・シンポジウムの企画・立案、学部・研究科・大学院におけるFD活動における具体的なFD活動を共有するための報告会の実施、教員が授業を行う際の基礎知識やヒントを集めた『FDハンドブック』の刊行、などを主に行ってきました。

このように「FD推進センター」は、FDに関する共通理解を得るための全学的な活動を展開してきておりますが、実施主体である学部・研究科における授業内容の方法・改善に結びつけていくことが課題となっております。カリキュラム改革、教育支援、研究支援、科学研究費の説明・案内などの例のように、教職員の多くの活動は教育力の向上に資する上で大切なことです。「FD推進センター」といたしましては、今までの活動に加え、教職員へのFD関連情報の発信とその情報の共有化、FDの再発見を中心に活動を進め、より多くの教職員が実践へ結びつけられるよう、東洋大学の教育・研究の質的向上、教職員への支援をしていく予定です。このようなFD活動には、教職員・学生の方々からのご要望やご意見が重要です。東洋大学のFD活動にご協力をお願いいたします。



CONTENTS

pp.2-5 平成21年度 学部FD活動状況報告会・寺崎昌男氏講演会

p.6 ティーチング・アシスタント FD研修会
アカデミック・ハラスメント研修会

pp.7-9 第2回授業改善事例シンポジウム

p.10 他大学との交流

p.11 学外FD関連研修会参加レポート

p.12 平成21年度東洋大学FD推進センターFD推進委員会活動状況報告
平成22年度東洋大学FD推進センターFD推進委員会活動計画

10学部10色

平成21年度学部FD活動状況報告会・
寺崎昌男氏講演会

「FD・SDのあり方を考える—学士課程教育構築要請のもとで—」

大学をとりまく社会の変化とともに大学に求められることも変化し、近年は「学士力」「FD」などの言葉が頻繁に聞かれます。そこで、学内教職員約110名が集まり、今行われている10学部それぞれのFD活動を学び合い（第Ⅰ部：学部FD活動状況報告会）、大学としてFDに取り組む際大切なことを改めて確かめる（第Ⅱ部：寺崎昌男氏基調講演会）を開催しました。

第Ⅰ部の報告会で各学部から報告された一例を紹介します。

平成21年12月19日（土）13:00～17:30

シラバスの総点検と『学習の手引き』～教育の体系化をめざして～

文学部

目的

シラバスの総点検…個人、学科、学部シラバスの充実、体系化を図り、学生に役立つシラバスにするとともに、新カリキュラムへ反映させること。
『学習の手引き』…学生の授業への取組みをより自覚的で高度なものとして、授業の改善につなげるために役立てること。

背景

学生に教育内容を明確に示すためのシラバスは、文科省の基準、本学教務部長の指針、文学部の理念・目標に合致しているかどうか、授業内容の過剰な重複がないということが大前提である。シラバスに沿って学生が主体的に学ぶための道しるべとして『手引き』を学科単位で毎年作成・改定し、授業、ガイダンスの際活用している。

シラバスの総点検

＜具体的方法＞

10月末までに今年度開講授業のシラバス点検（プリントアウトに朱書き）→主任が集約→次年度担当者（専任＋非常勤）に問題点を指摘→次年度シラバスに反映

＜点検者＞

各学科の主任、自己点検・評価委員が主体となり、学科開講の全科目について点検

＜点検事項＞

授業の目的、到達目標、講義スケジュール、成績評価の体裁および内容

シラバスの総点検をした結果

- ・授業の目的、到達目標などの記述にばらつきが見られた。
- ・今年度は体裁、形式の点検が主となり、内容的な点検にはあまり踏み込めなかった

今後の対応 「シラバス学」の確立を目指して
学部学科教育目標と各授業の目的の整合性が必要であり、授業の重複等の改良をする。

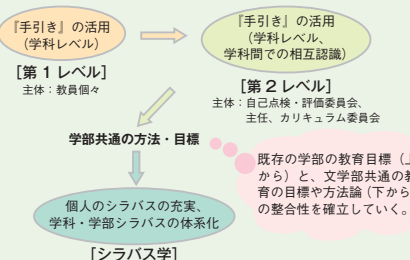


図1「学習の手引き」活用と文学部の「シラバス学」

[第1レベル]『手引き』を授業、ガイダンスの際活用し、学科内での教員の意識向上や教育内容に関する共通認識を持つ。

[第2レベル] 他学科の教育内容を相互に確認、学部での共通認識を持つ。

・以上を個人のシラバスに反映させ、学科、学部のシラバス体系化を図る

『学習の手引き』目次紹介（抜粋）

- ・学科、分野の紹介
- ・大学生としての学び方
- ・授業形態について
- ・ノートを取る、テキストを読む
- ・共同研究室の使用について
- ・オフィスアワーの活用方法
- ・図書館での文献、情報検索の仕方について
- ・発表/プレゼンテーションについて
- ・レポートについて
- ・卒業論文の手引き
- ・卒業論文題目例
- ・学習に際しての留意点
- ・資料（学会その他の情報源、参考文献・雑誌など）



FD会合 ～教員個々が抱える悩みを共有し、解決の糸口を見出す～

経済学部

目的

教育改善のための教員個々人の能力向上（努力）と組織能力の向上のリンク。教育活動に関する情報交換・共有による教員のスキルアップ。

継続的な活動による教育ノウハウに関する組織的な蓄積（資産）の形成。

背景

2005年度より導入した「経済学部教員総合評価」により、教育活動・研究活動・組織運営・社会的貢献から総合的にとらえる評価体系を確立させ、教育改善活動を推進。FD会合は教育改善をより高度化するために行う複数の取組のうちの一つである。

実施体制

年2回実施。

専任教員全員参加を原則とする。テーマ・科目ごとにグループをつくり、事前に選出された書記・司会のもと、90分間意見交換を行う。話し合った内容は、各グループの書記がまとめた報告書をもとに、後日FD会合報告会を開催し情報を共有している。

●春学期のFD会合● テーマ別会合

2008年度の討論テーマ…前年度評価アンケートの自由記述より

テーマ1：私語をなくすにはどうしたらよいのか？

- 2：教材（レジュメ・プリント・板書・PPなど）の提示のしかたについて
- 3：講義の進度・説明のしかたについて
- 4：成績評価のしかたについて

2009年度の討論テーマ…事前に教員にアンケートをとった

テーマ1：学生参加のゼミをいかに工夫しているか？（特に基礎ゼミ、2年ゼミ）

グループワーク・研究、ディベートなどのノウハウ

- 2：復習、予習の意欲を持たせる授業の工夫、授業への学生参加について
- 3：大規模講義科目の課題について（授業管理、期末試験、成績評価など）
- 4：卒論の評価方法、卒論指導など卒業研究について

●秋学期のFD会合● 科目別会合で授業経験・改善の意見交換

- ・専門科目・専門ゼミ（学科別）
- ・基礎ゼミ（学科別）
- ・一般教養的科目
- ・英語科目
- ・初習外国語科目

成果

・学科横断型、若手からベテランまで交えたグループ構成による相互刺激

例）ベテランは若手の熱意を肌で感じたり、ICT活用方法などを知ることが出来る。

若手はベテランの経験による長年の創意工夫を学ぶことが出来る。

悩みを共有することで精神的に安心感が生まれる。

・コミュニケーションを通して、同僚を知る良い機会となっている。

例）学部のなかで居場所が出来る。日々の業務がスムーズに出来るようになる。

・各グループの報告会を行い、報告内容を冊子にまとめて配布することにより、情報の共有化が出来る。

参加出来なかった教員にも配布し、教員全体のレベルアップを図っている。

今後の対応

5年間の包括検討を行う予定

必修「基礎実習講義」《読み・書き・そろばん》を統一的に ～教員のローテーションと巧みなテキストで育む1年次の基盤～

経営学部

目的

大学で必要な技能（数学的思考、レポート執筆技法、経営学へのセンスなど）を修得し、2年次以降の学修の基盤をつくる。

背景

経営学を学ぶ際の基礎的な技能が不足し、1年次でつまづく学生が多い。

実施体制

- ・3領域（統計・戦略分析・企業分析）構成。
学生は無作為に3グループに分け、同じフロアの3教室で開講
- ・各領域4回の実習：合計12回の実習
- ・領域毎に担当教員が交替する（学生30名程度 対教員2名）
- ・15分程度の講義＋学生の実習作業
- ・学生毎に曜日・時間（コース）が指定されている
- ・学生同士2名ペアの「班」で作業を行う（ペアは指定）

授業前に学生がすること

- 講義報告書を各領域終了後1週間以内に提出
—表紙はWebからダウンロード
- 黒・青色ボールペン使用。鉛筆不可
- 形式・体裁、内容不十分等により再提出
- 未提出は不合格
- 授業の出席管理
遅刻・早退は欠席扱い
テキストを忘れたら欠席扱い

成果

- ・対教員・学科全教員が担当することで、一体感が生まれる
- ・対学生・学校に来る、きちんと出席する習慣をつけさせる
—出席重視：休みグセが原級・中退の主たる原因
- ・同級生と共同作業をさせて、帰属意識や仲間意識を育てる
—孤立して大学に来なくなる人間が多い事への対策
- ・講義よりも実習の方が学生の士気が高まる

今後の対応

学生の取り組み状況をみると、テキストの改訂や運営面の整備が進み、出席率・単位取得率・レポート平均点は、年度を経るにつれてかなり高水準にまで達してきた。しかし、授業アンケートの結果をみると、予習の取り組み状況は改善されてきたとはいえ、テキストや課題そして教員による説明に関して十分理解できておらず、内容に対しても興味が高いことが課題として挙げられている。

今後の対策として、①各領域の課題内容や量の見直しを中心としたテキストの改善、②テキスト内容ならびに教員説明の改善による学生の理解度向上、③チェック基準のバラツキの是正・共有やチェック項目の明確化などの運営面の改善などに取り組んでいく。



毎回の演習問題に合格したら印を獲得

同僚から学ぶFD学習会

～報告&忌憚のない質疑応答により参加者全員が楽しく学び合う～

法学部

目的

様々な授業方式のあり方について、各教員がそのテクニックを披露し、学習会参加教員全員で東洋大学法学部生にとって良い授業とはどのような授業かを考え、自らの授業を見つめる機会とする。

背景

授業アンケートだけではそこから各授業の個性を看取することはできず、自他を含めた各授業の特性について教員が知る機会とはほとんどなかった。

実施

- 第1回（平成21年5月26日）報告者2名（専門分野から1名、語学分野から1名）
報告内容：前任校における授業改善の工夫について（報告者はいずれも本年度から本学法学部に着任した教員であり、しかも前任校において既に教育に携わる経験を持っていた）
- 参加者の声：
・主として大学の規模、地域的特性等、本学とは異なるところでの経験は、逆に本学に長く勤め、

本学しか知らない教員にとっては、新鮮な情報であり、極めて有意義な機会であった。

●第2回（平成21年7月7日）

- 報告者：本学に長年勤務する経験豊かな教員
- 報告内容：変化する学生への対応について
- 参加者の声：
・学生の気質や基礎学力は50年余りの法学部の歴史の中で大きく変化してきている。それに教員がどのように対処してきたかを知るとは、同時に法学部の歴史を知ることでもあった。
- ・実際にそれを体験してこれた教員が後輩に語りかける形で進められた学習会は、教員間の影響も大きく、活発な質疑応答が行われ、極めて有意義なものであった。

●第3回（平成22年1月5日）

- 報告者：長年他の大学で教鞭をとっていた教員
- 報告内容：教材作成のポイント
- 参加者の声：
・一般的な話題ではなく、授業において配布するレジュメ等の教材をいかにして作成するかとい

う点に絞って報告され勉強になった。

- ・レジュメを集めていけば1冊の講義録が出来上がるような作成方法は、参加教員にとっても見習うべき点の多いものであった。

成果

本年度から始めた為、まだその効果について結論を述べるには時期尚早であると思われるが、3回を重ねた段階における評価としては、極めて有意義であるという一語に尽きる。授業の相互参観なども全学の委員会では話題になったことがあるが、教員がその授業運営の工夫について全体に披露し、忌憚のない質疑応答を重ねる中から、各教員が他の教員の工夫を参考にし、それを授業に反映させることができるものと確信している。

今後の対応

各教員が自由に授業について語り合う場を持つことは重要であると考えられるので、今後も年に3、4回程度開催し、法学部全体での授業改善を行ってきたい。

学生参加型FDへ ～教員と学生による協働プロジェクトの展開～

社会学部

目的

学部が得意とする臨地教育・フィールドワークの現場性を重視し、学問と社会の繋がり、異なる立場／価値観への理解を深めること。

【紙の総合学習を通じた地域間連携】

プロジェクトの内容

URL：http://www.soc.toyo.ac.jp/culture/menu/kami%20project/kami%20main.html
社会文化システム学科が、教育上の柱の一つである臨地教育を基盤に、学科教員と学生がともに現場に出て、見て聞いて考え、社会貢献をめざす総合学習プログラムを企画、正課外の学科プロジェクトとして2007年度に発足した。

地元から世界に広がる複合的な地域システムをとらえるテーマとして、文京区の地場産業のひとつである印刷業、関連して「紙」を中心テーマに設定。

総合性・社会性重視、地域の支援を得て、 学生の発想もプロジェクトに反映

- ・二つの研究グループ

地元密着型の「地域誌班」…区内の印刷・出版関連業
グローバル性・環境意識の「地域環境班」…リサイクル、紙から見るグローバル化

- ・地域との関係性強化
区内の行政・関係業界のみなさんの支援、印刷博物館の共同研究など。公開シンポジウムはメディアコミュニケーション学科の協力を得て、Hits（白山インターネットTV）コンテンツとして発信
- ・学生の発想・主体性を取り入れた動き
メディア班の映像・ホームページ作成、他キャンパス・他大学との学生交流・勉強会、社会貢献の追求（フェアトレード）、大学祭出店など

教員の役割

調査研究の実施を学生の主体性を委ねる一方で、教員は、地元行政や関係する会社・業界、あるいは専門家などのネットワーク構築を担当し、調査結果を広く社会や学問に位置づける視座の提供を担う。

成果

学生は、プロジェクト推進に寄与し学外の人々に認められる経験を通して、大学や社会への帰属意識を育てる。継続的なプロジェクトは、後輩を育て自ら育つ。自発的な参加の正課外プロジェクトゆえの成果は、期間限定で課題や展開が定まっている正課教育とは異質のもの。学生の主体的な参加は、学生と教員が協働して学科（学部）理念の実践に参加する「学生参加型FD」の方向性につながる。

今後の対応

参加者が限定される状況に対し、調査研究の成果や参加学生の経験をより多くの学部生に還元し、参加者を拡大して「学生参加型FD」の流れを強めることが課題。学部共通の正課科目「社会調査および実習」への組み込みなども、そのための検討項目である。

学部組織と教員・学生がそれぞれの立場で地域・社会との連携を主体的に続けていく仕組み・工夫を模索し、学部を構成する各学科の研究領域を統合する方向へ展開する。

『FDカルテ』で教員間連携 ～教育の質保証を図る授業記録の共有～

理工学部

目的

機械工学科においてはJABEE認定を得ており、FD活動の一環として教員の「FDカルテ」により、学生の授業評価等に対する自己評価を実施して授業改善を図る。

背景/必要性など

各教員が担当する科目について、セメスター終了後における授業総括として利用している。FDカルテの記入により学生の授業評価と教員自身の評価との違いを認識することにより授業に対する取り組みの姿勢が変わる。またJABEE対応としてFD活動の証明資料にも活用している。

実施体制

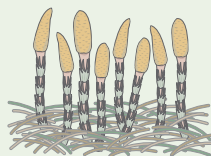
学科のJABEE担当教員より授業終了後「FDカルテ」記入の依頼がなされる。教員は授業のまとめの資料と共に提出し、学科においてファイリングされる。本資料は教員の閲覧が可能となっている。

成果/効果など

機械工学科における教育の質保証のための手法として教育のトレーサビリティとして効果が認められる。「FDカルテ」のデータを教員が共有することにより教員間連携を深めることができる。

今後の課題と対応策

「FDカルテ」による授業改善へのさらなる取り組みと今後導入を考えている学生の「学習カルテ」への取り組みと合わせて、学習支援システム構築による教育の質の維持向上が課題である。



「教員カルテ」(記入例)

科目名	生産加工システム	担当者名	神田 雄一
講義日時	金曜日	5時限目	
受講者数	数値は大きな数値で結構です	150名	
評価基準および評価分布 (%)	・年度末試験 (50%)、レポート (40%)、授業での発言 (10%) を総合的に評価 S (2%)、A (8%)、B (45%)、C (35%) D (10%)、E (0%) 数値は大きな数値で結構です		
出席	毎回取る	たまに取る、取らない	
マイク使用	使用	不使用	
AV機器	使用	液晶プロジェクター	OHP、ビデオ
教科書	使用	不使用	
補助教材	使用	プリント、その他 ()、	不使用
予習と復習のためにしている事項 (例えば宿題、レポート) 適宜レポート課題			
授業で特に実施している事項 (例えば質問表配布) ミニツペーパーの採用、授業の初めに解答時間を設ける			
学習意欲を引出すために特にしている方法 新聞等により最新技術、話題と関連させる授業			
授業アンケートへの自己評価 パワーポイントの変換時間、文字の大きさなど配慮する必要がある			
自由記述			

東洋大学国際化への貢献と語学教育の強化

国際地域学部

背景

現在、高等教育のグローバル化が急速に進んでおり、優秀な学生の奪い合いの国際化も進んでいる。国際地域学部でも内部的な努力として国際地域学科に英語コースを取り入れ、ISEPによる交換留学生等英語を教育用語とする学生の拡充を視野に入れて、国際化の進行という変化に対する教育上のパワーを獲得しようとしているところである。

学部の対応策

そのために特に力を入れているのは英語力の養成・強化であり、通常の英語教育や英語検定資格のレベルアップのためにCALL教室を整備することに加えて、異文化コミュニケーション能力の向上を目指

すために、英語特別プログラム(ESP)の設定、イングリッシュ・コミュニティ・ゾーン(英語のみで会話するスペース)の構築を始めたところである。また、現在検討中の新教育課程においてはさらに語学関係の教育の充実を図ることを予定している。さらに日本人教員の英語力のアップ、外国語を母語とする教員の採用も進めている。

実施体制

学部語学教育委員会を中心とし、カリキュラム委員会、英語コースの担当グループが協力する形でシステムの構築をすすめている。21年度はかなり準備に時間とエネルギーをつかったが、試行として行ったイベントには地元高校生の参加がみられるなど発

展の可能性も見えている。イングリッシュ・コミュニティ・ゾーンについては22年度から本格的な活動を始めたい。

提案

しかし、国際的な変化という現象に対する対応は1学部、1学科の能力や努力を超えた社会的要請であり、東洋大学全体の対応が必要と認識している。事実として、洋の東西を問わず優れた国際交流の業績を上げている大学では、教員の努力・貢献のみならず本格的な支援組織や支援スタッフを整備していることが例外なく見られる。東洋大学においても国際交流センターの機能とスタッフの強化を実現することが必要と考える次第である。

入学時の基礎学力を伸ばす

～綿密な「学習支援プログラム」から広がる学生の学修の輪～

生命科学部

目的

基礎学力が低下傾向にある入学生に対し、きめ細かな学習支援を行うこと。大学で学ぶ過程で学生が抱える学修に関する悩みをサポートすること。

背景

平成17年度より実施している新入生基礎学力診断テストの結果より、以下の課題が見出された。

・基礎化学

平成17年度から平均点が徐々に低下していたが、今回少し平均点が上昇し、平均点の低下は止まったものの、学科間で少し平均点に差があった。入試で化学を選択した学生の方が、生物を選択した学生より平均点は高くなった。また、一般入試で入学した学生の方が、推薦入試で入学した学生より平均点が少し高かった。

・基礎生物

平成20年度から実施したが、昨年度の結果と学科間で平均点に大きな差はなかった。入試で生物を選択した学生の方が、化学を選択した学生より平均点は高くなった。この点は化学と結果が異なった。また、新入生学生生活実態調査の結果より、生命科学部で学習する意欲を高めるための方策が必要であると考えられる。

学習支援プログラム導入。その一環として、学習支援室を設置

・新入生に対する学習方法の相談、大学院進学や研究分野の相談、授業の受け方や勉強方法の相談、基礎学力の向上のための補習授業などを若手教員(助教)が中心になり実施する。
・学習支援室に学生が随時訪ねて自習することや、予め決められた時間に指導を受けることができる。

学習支援室

・利用者……延べ1000名
・活動内容
①相談受付…各授業内容の相談、大学院進学の相談、研究の相談など
②勉強会の開催…化学の計算問題を解く勉強会(春学期毎週金曜日5時限) 高校数学(三角関数・微積分)の勉強会(秋学期毎週水曜日5時限)



学習支援室



③英語で映画を観る会の開催…英語専任教員による解説付き

成果

・次第に学習支援室の利用者が増加し(開設当初は化学の勉強会参加者は3学科総計70名程度であった)、学生の輪が広がり、科学サークルが設立されるまでになった。

問題点と解決策

①助教による学習支援室運営の限界

学生が相談したい時に不在という場合がある。助教2名が中心に1日に2-3時間学習支援室に在室しているが、常駐するスタッフがいることが望ましい。さらに、他の教員との連携により、充実した支援体制を構築することが必要と考えられ、手始めに英語専任教員による英語教育を開始した。

②教材・設備の拡充

利用している学生から、学習支援室の座席数およびPCの増設、文系、理系の教科書・辞書類の拡充などの要望が出ている。

③利用者の成績の追跡

学習支援室が利用者にどの程度役立っているのかを評価する必要がある。秋学期からは利用者に学籍番号を記入してもらうことにした。その結果を基に、学習支援プログラムの改善を図ることを考えている。

学生と教職員の意見交換会を実施して…

ライフデザイン学部

目的

授業アンケートの課題について学生・教員・職員で検討し、学部として指摘された課題の要因がどこになるのか、どのように改善することが可能かなど、問題解決の方向性をさぐる。

背景

・毎年行う授業評価アンケートの検証、教育効果の解明が必要
・教員は義務的なアンケート実施、学生も義務的なアンケート回答に陥っている

実施体制

2009年春期の授業アンケートの集計結果を基に、11月25日第1回開催。学生参加自由。

実施報告

出席者…学生2名(4年生)、学部長、各学科主任、FD委員会、自己点検・評価委員会、事務次長、課長補佐他事務課職員数名)
※学生の参加は2名だったが、その内容は表1に示す通り、多くの学生の意向を代表するとみられる内容で、教職員側の応答も終始丁寧に進められた。



写真1意見交換会の様子1 写真2意見交換会の様子2

課題検証

学生からの意見の内務的な処理で直に対応できるもの(例えばシラバス改善)はそのような回答を行い、そうでない意見、たとえば、時間割、カリキュラムの改正、教室や施設、設備整備を伴うものなどについては宿題とした。意見としては圧倒的に後者が多い。

表1 授業改善を目指す学生との意見交換会での学生意見(第1回) ☆印は対応案

- 学生からの意見(全授業アンケート集計を開示し閲覧)
●授業選択の理由が授業シラバスを見てという回答が少ない⇒ ★対応可能
●授業シラバスをもっと改善すべきではないか⇒ ★対応可能
●就活に不可欠なTOEICと英会話を必修にすべき⇒ ☆対応がすぐにはできない
●語学授業をもっと充実すべき、第2外国語も⇒ ☆対応がすぐにはできない
●3年生の時間割を就活に配慮したものにできないものか⇒ ☆要検討
●勉強して資格をとるという講義の流れがはっきりしている⇒ ★対応可能
●教室の環境改善が不可欠⇒ ☆すぐに改善不可能な場合あり
●教室の空調が最悪。気分が悪くなる学生もいる⇒ ☆すぐに改善不可能な場合あり
●気軽にPCが使える環境を整えて欲しい⇒ ☆すぐに改善不可能な場合あり
●休講と補講の掲示場所が別々であるのは不便⇒ ★対応済み
●食堂はどうかして欲しい。メニューおよび席数の充実⇒ ★2010年度改善
●施設が充実していれば、大学への愛着が更に増大するのではないか⇒ ☆今後検討必要
●入試パンフ等に食堂の写真がないのは非常に残念⇒ ★対応可能
●図書館の蔵書数をもっと充実して欲しい⇒ ★対応可能

意見交換会から見てきた主な今後の課題

・学生にどのように授業を組み立てているかを改めて伝える必要がある。

その上で、履修時に履修目標と授業の取り組みを表明していく。

・シラバスの記述、表現方法にも工夫が必要。

「シラバス」(履修要項)をしっかりと見ないで履修しているという意見に対しては、表記方法を見直すこと、またシラバスのデザインを変えることで対応の可能性はある。勿論このことへの教職員側の反論もあろう。

・語学教育の充実

意見交換会に出席した学生からは語学教育の不足さが指摘された。特に就活時に英語力の必要性を痛感したと兩名とも主張、第2外国語という設定も含めて再検討すべきではないかとの提案があった。これに対しては2009年度でのカリキュラム改訂検討でも教員間、学科間で協議が進められたが、教員側は、ライフデザイン学部学生の語学学習への関心度の低さから逆に縮小意見が多く見られた。もし意見交換会を先に実施していたらカリキュラム改訂の結果が異なっていたかもしれない。

・環境整備

授業評価以前の基本的な課題、例えば良好な学習環境の整備、PC台数や利用体制など教育施設整備問題も多く訴えられている。これについては学生ばかりでなく、教員からも同様の意見が多数寄せられている。

学生の意見は授業のみではなくキャンパス全体に及ぶが、日頃学生がキャンパス内で意識している問題の所在が確認された。

この意見交換会の実施や授業アンケートの全面的開示については、教員側に一方向的な教員批判があるのではないかと懐疑的な意見も見られていた。しかし参加した学生の意識は高く、一方的批判ではなく提案を含むものであった。学部として今回教員のみでなく、職員も多数参加してもらい、学生意見への対応が円滑に進む可能性が認められた。当然のことではあるが「授業改善」には教職員が一体的に取り組む必要性を痛感した。

今後の対応

学生意見のもうひとつの収集方法として、「意見箱」設置を検討している。可能な限り年度内に設置を行い、卒業生に対しても意見の表明ができる場を構築したい。現時点では校舎内に2つの意見箱を設置し、記名による意見のみ回答するルールとする。また回答責任者は学部長とするが、回答は自己点検・評価委員会、FD委員会の合同会議での協議へ行くことを原則とする方向である。これらのルール化も併せて検討する。(文責：高橋儀平)

総合情報学部の「自主ゼミ」の実施

総合情報学部

1. 実施のねらい

総合情報学部は総合情報学科の一学科制であり、文理の枠を超えた「第一級の情報の創り手・使い手」として学生を育成し、社会に送り出すことを教育の目的としている。学部の特徴ある教育を達成するために、専任教員による講義演習をはじめ、学部外講師招聘による実践的な教育プログラムを実施し、学生と教職員が教え学びあう場を醸成することに努めている。

その一環として、学生にグループ活動の機会を用意し、慣れ、習熟してゆく場として設けたものがゼミ活動である。テーマを決め、個人を越えたグループによる情報の収集・編集・表現のスキルを学び、コミュニケーション能力と自律性を身につけることをねらいとしたものである。各ゼミには複数の教員がアドバイザーとして担当している。21年度は単位認定を伴わないことから、通称「自主ゼミ」としてスタートした。

2. 春学期ゼミ

4月中旬にゼミテーマを提示して説明会を開催し、5名程度の学生の応募があった9テーマを学部として実施した。9つのゼミの名称は次のとおりである。

オープンソースゼミ、Webカウンセリングゼミ、2016年東京オリンピック応援ゼミ、内部統制とITゼミ、SEの仕事とは何かゼミ、アウトサイダーアートって何だ?ゼミ、ドラえもんを作ることでできるか考えようゼミ、物事の本質とは何か?ゼミ、民族舞踊・民族音楽を体感するゼミ

名称からも、IT技術を追求するテーマから、人間、組織・集団活動、先端機械、哲学、芸術の分野で情報の利活用などに焦点を当てるものまで多様なテーマのゼミ活動が展開された。これらのゼミは一週間に一回程度のペースで自主的に活動を行い、7月には春学期の進捗や成果を報告する発表会を開催した。

3. 秋学期ゼミ

10月初旬に学生募集を行い、春学期と同様の準備プロセスを経て、12テーマのゼミを実施することにした。春学期からの継続を含め、ゼミの名称は以下のとおりである。

オープンソースゼミ、Webカウンセリングゼミ、スポーツ応援ゼミ、アウトサイダーアートって何だ?ゼミ、ヨガと脳波ゼミ、実用英語の習得テクニックゼミ、川越キャンパスを自分で作ろう!ゼミ、グローバルアニメーションゼミ、簿記・会計とは何かゼミ、地域の活動を体感しよう!ゼミ、

SEの仕事とは何かゼミ、ドラえもんを作ることができると考えようゼミ

秋学期には、英語や地域貢献などのテーマも加っている。1月には発表会を実施しており、春に比較して発表の内容・方法等も充実していることが確かめられた。

4. 1年間の評価と今後の展開

「自主ゼミ」は、グループで自律的学習等のソフトスキルを身につけることを目的とし、21年度は単位認定のない課外講座の位置付けで開始した。1年間の実施により、学生の意欲と活動を高める効果を引き出したものと評価している。

実施によって得られた課題は、時間割指定の無い課外講座であるため、学生および教員の参加できる時間帯がごく限られた短時間となったことである。多くの自主ゼミで昼休み40分程度の短時間となるなどが課題となっている。そこで、22年度からは開講時間を時間割に設定し、単位化する科目として実施する計画である。

今後も様々な機会を通じて学生のニーズを把握し、学生が自信を持って教え学び合い、卒業して就職できる教育プログラムを組織的に実施したいと考えている。

第II部では、学校法人立教学院本部調査役、東京大学名誉教授、桜美林大学名誉教授、大学教育学会前会長、教育学博士 寺崎昌男先生より、基調講演をいただきました。「FD・SDのあり方を考える-学士課程教育構築の要請のもとで-」と題し、大学がおかれている状況、義務化されたFD



ということの解釈の仕方とその本質、SDの取組み方と提案、中教審が主張している重要点の整理、などについて説明され、これらを理解したうえで独自のFDを創造していくことが大学の役割であると結ばれました。質疑応答・討論会では、学生が大学で学ぶ成果への

期待について、教員・職員・学生の連携と協働のあり方、等について問題提起があり、自身の業務姿勢を喚起される貴重な機会となりました。

全体を通して、FDという言葉に捉われず、学力を備えた学生を社会に送り出すためには、学修の可能性をひろげるとともに、学部・学科の特徴を出していくことが重要であるが、そのことがまさにFDにつながることで、また、そのためには教員と職員の連携が大切であることを学びました。

今後ともFD推進センターは学部・研究科のFD活動の支援をしてみたいります。シンポジウム等へご参加いただくとともに、忌憚のないご意見をお寄せいただくなどの、ご支援をいただきますようお願い申し上げます。

ティーチング・アシスタント FD (Faculty Development) 研修会

研修内容

1. FDとTAの役割について
神田 雄一研修部会長（理工学部教授）
2. 教員の立場からTAにのぞむこと
都丸 善央（経済学部助教）
3. TA経験談
町田 直子（文学研究科英米文学専攻）
青木 隆文（工学研究科機能システム専攻）
青木 崇（経営学部非常勤講師）
4. 質疑応答
5. 閉会挨拶 竹村 牧男（学長）

●開催概要

昨年度に引き続き、本学における継続的な教育改善への取り組みの一環として、TAのためのFD研修会を実施した。

今年度は約200名のTAを対象に、TAの役割や責任について一層理解を深める目的で行った。

初めに、神田雄一部会長より、東洋大学の理念に基づく教育方針等、FDとTA職務における基礎知識について説明があった。

続いて「教員の立場からTAにのぞむこと」と題し、経済学部都丸善央助教より、日々のTAの役割・仕事と、仕事に臨む時の意識につ

いて講演があった。学部・科目・担当教員によって異なるTAの仕事について、どのように業務を遂行すればよいか、学生に対してはメンターとしての役割を果たす意識をもつこと、授業の効率的運用のための助っ人として、担当教員と密なコミュニケーションをとり授業運営に参加することの重要性、等について説明があった。TA経験者でも、教員がのぞむような対応を日頃出来ているかどうか、再確認する機会となった。

次に、今年度の新たな項目として、TAを経験した先輩からの経験談を聞く機会を設けた。3名のTA経験者から、TA業務を担当した経験として、仕事内容・難しかったことや困ったこと・学生への対応方法等について紹介があった。

最後に、学長より「TAは単なるアルバイトではなく、よりきめ細かい授業運営のために大切な存在である。」というメッセージが伝えられた。

●欠席者への対応

研修会の録画映像をDVDで配布し、視聴して勉強できるシステムをとりました。

日本語を第1言語としない留学生TAは、自分のペースで学ぶことができて良かったそうです。

●参加者の声

- ・FDという言葉は初めて聞いたTAも多く、TAがどのようにFDに関わっていくのか理解出来、とても勉強になった。
- ・TAを経験した先生の講演は、TAにのぞまれることが明確で興味が持てた。
- ・あまり他学部・学科のTA業務については知る機会が無いので、自分と異なる業務と役割があることを知る良い機会となり参考になった。

る機会が無いので、自分と異なる業務と役割があることを知る良い機会となり参考になった。

●研修会の充実に向けて

昨年度開催した第1回の参加者の意見・要望を取り入れながら、より教育現場に役立つ、且つTAの能力向上に資する内容に改善し実施しました。今回のアンケートでは、TA同士の交流がほしい、業務を明確化してほしい、という要望がありました。FD推進センターでは、TAの更なる活躍ときめ細かい教育活動を展開するため、内容の充実を図って参りますので、ご協力をお願いします。

当日の映像、資料等はFD推進支援室にありますので、ご利用ください。



神田研修部会長

ミニレクチャー（講演要旨）

- 大学院におけるTAの役割
ティーチング（教育）を行うこと
……教員の教育活動を補助し、学生に対するきめ細かい指導を行う。
メンター（後輩の良き指導者）
……講義内容の深い理解、疑問点の解消、よき先輩（あるいは兄貴・姉貴的）の存在
将来のファカルティ（学内インターンシップ）
……助教・講師の採用の際に、TA経験の有無を評価する大学の事例もある。

開催日時
会場

平成21年9月28日（月）14：00～17：00
6101教室（白山キャンパス6号館1階）

アカデミック・ハラスメント研修会

題目 アカデミック・ハラスメントのない大学づくり

講師 御興 久美子氏（奈良県立医科大学講師NPOアカデミック・ハラスメントをなくすネットワーク代表理事）

講演内容

1. アカデミック・ハラスメントの定義
2. アカデミック・ハラスメントの事例
3. 大学院生がうけるアカデミック・ハラスメント
4. 教職員に対するアカハラ・パワハラ
5. ハラスメント防止のためにすべきこと

●開催概要

昨年度に引き続き、健全な教育現場を維持するために、近年、社会問題化しているアカデミック・ハラスメントの防止を目的とし、

教職員・大学院生を対象に研修会を開催した。

研修会では、講師に奈良県立医科大学講師・特定非営利活動法人アカデミック・ハラスメントをなくすネットワーク代表理事の御興久美子氏を迎え「アカデミック・ハラスメントのない大学づくりにむけて」と題し、ご講演をいただいた。

御興氏は、アカデミック・ハラスメントを「研究教育の場における権力を利用した嫌がらせ」と定義し、優位な関係の生じる場、例えば教員間（上位教員と下位教員）・学生間（先輩と後輩）・教員と学生・評価（学生から教員に対する評価）・雇用形態などでおこなわれる理不尽な行為について、事例を交えながら説明された。

大学として、引き続き、教職員・学生に対してハラスメント防止のための啓発活動を徹底して行っていくとともに、ガイドラインの作成・対応組織の充実化を検討していく予定です。

当日の資料はFD推進支援室にありますので、自らの被害の発生・拡大の防止のために、ぜひご利用ください。

●参加者からの声

- ・内輪で良いと思っていたことでも、外から見ればアカハラになることが多々あるのだとわかった。
- ・原因はどこにでもあることがわかり、恐ろしくなった。今後意識を高めていきたい。

くなった。今後意識を高めていきたい。

- ・教員サイドは学生に対して時代に適応した指導をする必要があると思った
- ・アカハラの被害者・加害者にならないために有意義な研修会であったが、出席者が少なく残念であった。加害者になりそうな人に参加させる必要がある。

ミニレクチャー（講演要旨）

- ハラスメント被害者のパターン
①積極的加害行為者…意図的に嫌がらせをおこなう人のこと
（証拠のないように行われ、周囲の者も加害行為に加担している場合が多い）
②消極的加害者…嫌がらせを見て見ぬふりをする人のこと
加害者の指示に従って嫌がらせに加担してしまう周囲の人のこと
③無自覚的加害行為者…意図せず悪意なくおこなった言動が相手の気持ちを著しく傷つけてしまう人のこと
★防止のために
消極的加害者（②）を無くすことで積極的加害者（①）を無くし、無自覚的加害行為者（③）への啓発としてコミュニケーション・スキルを向上させることが必要。
つまり、大学をとりまく全ての人が正しい知識を身につけることが大切である。

開催日時
会場

平成21年11月21日（土）13：30～15：30
6312教室（白山キャンパス6号館3階）

第2回 授業改善事例シンポジウム

昨年度より、授業改善を積極的に取り組んでいる教員から具体的事例の紹介をしていただくことにより、教員各自が授業改善のためのヒントを見つけ出す機会とするためのシンポジウムを開催しています。今回は、学部（学科）として行っている授業改善事例（①と②）とユニークな（個人的に取り組んでいる）授業改善の事例（③と④）が紹介され、学生の授業に対する関心や意欲を高めるような取り組みや授業改善に資するような実践例について学び合いました。

開催日時：平成21年11月7日(土) 13:00～17:00
会場：6313教室（白山キャンパス6号館3階）

① 経済学部総合政策学科における基礎・導入教育

～学部・学科を越えたFDの推進には「具体的な内容」よりも「アプローチ・考え方」が重要～

経済学部 加賀見 一彰



総合政策学科における基礎教育は「基礎ゼミ」と「専門基礎」を二本柱として科目の組織化と担当者の組織化を図っている。この組織的な取り組みの基盤には、グランド・デザインの確立と、科目間・教員間のコミュニケーションが密であることが欠かせない。

グランド・デザイン



1年次に履修するこの2つの連携科目によって、学生が2年次以降学んでいく上で、基礎となるミクロ（経済学）・マクロ（経済学）の基礎が確立され、経済の基礎、私たちがとりまく社会制度について知ることができる。また、1年生からのゼミで大学での学び方やディスカッションでの考え方を知り、その後の講義や卒論を進めていく上で役に立つなど、大学での専門学習の準備学習となっている。

●基本事項の整理

まず、学部・学科の教育理念が出发点となる。本学科では「自分自身の手で政策と企画を描いて提案できる力」という教育理念に照らして、科目間の組織化（カリキュラム設計）と科目内の組織化（シラバス設計）を検討している。この際、各科目の範囲と科目間の連携性（スコープ&シークエンス）が鍵になる。さらに、科目の組織化と並行して担当者の組織化、すなわち各担当者の役割分担と相互コミュニケーションの整備が求められる。そして、本学科の基礎教育では、「基礎ゼミ」と「専門基礎」を二本柱として科目の組織化と担当者の組織化を図っている。

●基礎ゼミ（ゼミナールⅠ）について

基礎ゼミは、1年次必修で6コース設置されており、全て専任教

年次	科目名	区分	担当
1	ミクロマクロ経済入門	必修	専任
	ミクロマクロ経済入門演習	必修	混在
	総合政策入門	必修	専任
2	ミクロ経済	必修	専任
	ミクロ経済演習	選択	非常勤
	マクロ経済	必修	専任
	マクロ経済演習	選択	非常勤
	ゼミナールⅡ	必修	専任
3・4	ゼミナールⅢ・Ⅳ	必修	専任
	応用・発展科目	選択	混在

員が担当している。春学期では個人発表や社会見学、秋学期はディベートを行う。その役割は、新入生の仲間作り、コミュニケーション能力の向上、問題意識の醸成、および、大学との情報伝達経路の確保などである。コース間の調整（日程や内容、評価方法）や情報交換などのために、学期開始前から担当教員間で数次のミーティングを行う。また、専門科目の担当者が最低でも1名入ることで、2年次以降の専門科目群との連携性を担保している。

●専門基礎について

専門基礎は、1年次に配置された4科目（全て必修）、2年次に配置された4科目（必修と選択が2科目ずつ）が中心となる。これらは、理論と応用、講義と演習、専任担当と非常勤担当といった多面的な結びつきを持つ。ここでは、各科目の範囲と連携性を整理しつつ、担当者間のコミュニケーションを実現することが鍵となる。

【コメント】

これらの取り組みは時間をかけて少しずつ蓄積・改善してきました。これからも、外部環境や学生気質の変化に柔軟に対応するために、組織化とコミュニケーションの深化を進めていきたいと思います。

【参加者からの質問にお答えします】

- Q. 担当教師の専門が違うので、教育内容と到達目標の調整はどうすべきなのか、その具体的なやり方を教えてください
- A. 当然ながら、セメスター開始前に、内容や評価基準について議論を深め、共通の基準を確立する必要があります。具体的なやり方としては、「とにかく共通化しなければならない」という意識を「共有化」することだと思います。意識の共有化なしには、内容の共有化は無理だと思います。意識の共有化を進める方法としては、いろいろありうと思いますが、本学科の場合は、新規採用で教員が入れ替わることを契機として、既存教員が新任教員を主導するかたちで進んできました。

【学生の声】

- 3年、4年次の学生に、1年、2年次の基礎教育を振り返ってもらいました。
- ・基礎教育を受けてみて自分の興味のあることを見つけて次の年から好きな授業を受けるようなかたちがいいと思います。
 - ・実際に今就職活動で新聞を読んだりする時に役立っている面もありますし、経済学部に入ったからには必ず勉強すべき内容だと思います。
 - ・社会の制度や事象に対する、自分なりの考察を行う基準を得ることができそうです。

2 スキャネットシートとインターネットの活用による講義の活性化

～学生ひとりひとりの関与を高める～

経営学部 小嶋 正稔



●導入の背景

経営学部の講義では、大教室を使用した多人数講義が多くある。多人数の講義の欠点は、一方通行的な講義になりがち。仮に出席を取ったとしても多人数ゆえにその後処理は大変であるし、講義内の確認テストをすればその採点にはたくさんの時間を割かなければならなかった。しかしこのサイズの講義が重要な科目に多い以上、これを活性化しなければ学部教育効果は限定的になってしまう。それゆえ、多人数を相手にしながら一人一人に対応し、講義への関与を高めるマス・カスタマイゼーション (mass customization) の手法が必要となり、3年前からスキャネットシートを活用している。

●スキャネットシートとは

スキャネットシートはさまざまな種類のシートが用意されてお

り、その中には、出席カードと簡単な小テストを行う用紙がある。この用紙とインターネットを活用し、時間の制約をカバーして講義を有効にする一つの方法として、事例を紹介する。

●活用法 その① 小テスト

講義の中間や最後に理解度テストを行うことが出来る。この用紙を使って出席点をつけることも可能だが、それでは講義への関与の上昇は見込めない。かえってただ参加する学生によって教室の雰囲気が悪くなることすらある。そのために出席点ではなく、確認テストの結果を出席点としてカウントすることで、講義への関与を高める工夫をしている。しかもすべての氏名欄は、画面上で一挙に確認することができることから、代筆を即座に見つけることができる。多人数のため、そのような作業は事実上できないが、学生にこのよ

3 産学連携・映像メディア講座の試み

～事前情報・授業概要の公開と共有～

総合情報学部 藤本 貴之



●産学連携・映像メディア講座について

映像メディア業界の第一線で活躍する専門家を外部講師として招聘するなど、他大学にはないリアリズムが特色。春学期 (255名) は座学で、映像メディア産業の「構造」や「仕組み」の理解、秋学期 (90名) では受講者選抜を行い、実際の制作技術を学び、グループでの「映像作品制作実習」を行う。春学期・秋学期のいずれも、1年生が主に履修する一般教養の「総合科目」に置かれた講義で、必ずしも映像やメディアといった進路に関心がない学生も受講し、藤本氏は2年時以降の専門科目の発展への「こやし」となれば良いと考えている。

本講座は外部講師を招聘するが、それらゲストに授業を「丸投げ」という形式はとらない。担当教員 (藤本氏) とゲスト講師とで、学生ニーズや理解水準・雰囲気などから、事前の綿密



授業風景

な資料作成・打合せを行い、授業効果を高める仕組み作りを徹底している。

●学生の参加意識・関心の向上

授業では、学生の参加意欲・関心の向上のために、様々な取り組みを行う。例えば、専用ウェブ・サイトを春休み段階から設置し、シラバスではフォローできない細かい講義情報や外部講師情報などの事前提供を行い、関心を持って授業に参加できる環境を構築した。また、授業内容は、専用ブログを設置し、できる限り早いペースで当日の講義内容を「テキスト、写真、スライド、映像」でまとめ、公開した (授業は全て撮影し、公開している)。授業では毎回、コメントカードを配付し、その中から10点程度を翌週の授業の冒頭20分程度で回答・解説する時間とした。受講者限定の「SNS」も開設したが、クロードな空間では、授業では見られない意見交換も行われた。これら多様なメディアを活用することで、学生の参加意欲や就学意欲の喚起と、学生意見やニーズの授業へのフィードバックの実現を目指している。

4 講義と演習の組み合わせによる理解度向上への取り組み

～巧みな小テストで学生ひとりひとりの能力を把握し講義に反映～

生命科学部 長谷川 輝明



必修基礎科目の多人数科目では、どうしても一方通行の講義になりがちであり、学生の理解度に応じた授業を進めるのは難しい。そこで、半期あたり3～5回程度 (ランダムに)、演習を取り入れる工夫をしている。

●パワーポイントによる講義の長所と短所

講義の進め方はそれぞれの教員のポリシーによって千差万別であるが、筆者は主としてパワーポイントを用いた講義を行っている。パワーポイントを用いた講義の利点は、(1) 毎年毎年の講義レベルの均一化、(2) 「教え忘れ」「言い忘れ」などの教員側ケアレスミスの防止、(3) 講義中に気づいた改善点をすぐさまパワーポイント資料に反映させることで翌年の講義に確実に反映させることができること、などである。また、(4) 一旦資料を作成すれば次年度以降の準備が格段に省力化でき、講義レベルの改善により多くの時間を割くことができることも大きな利点であろう。しかしその一方、パワ

ーポイントによる講義には短所もあり、それは主として薄暗い講義室で教員が一方的に内容を説明するスタイルに陥りがち、つまりは「双方向性」に欠ける点である。

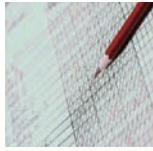
●パワーポイントによる講義の短所を改善するための対策 「双方向性の低さ」を改善するために…

◆講義中に不定期に行う小テスト

小テストである以上その得点は成績にも当然反映されるが、テスト中であっても友人との相談や、さらには教員への質問ですら許可している。

つまりこの小テストを行うことで、自分の理解度を把握するための機会を学生に与えること以外に、教員への質問がしやすい時間帯を強制的に設定するという意味合いもある。必ず授業の後半を使って演習を行い、チャイムと同時に回収し、前に座った方が解答時間が多きようにする工夫もしている。

うに代筆を確認するプロセスを具体的に見せることで、代筆への抑止力が働く。



またこのシートを使った試験は、数日中に処理をして学生にメールで返却する。メールには答案がpdfファイルで添付されるため、直筆のコメントや間違え箇所の指摘もでき、成績の不透明感の排除にもなる。次週までにメールで成績を返すことのメリットは、答案の返却に講義時間を使う必要がないだけでなく、学生にセルフマネジメントの機会を与える効果がある。「今回失敗した。次回は挽回しよう」などの機会を講義期間内に与えることができる。終わってから反省しても遅いということだ。

その② e-Learning「ビジネスゲーム」

ビジネスゲームという合宿講義には、インターネットを活用したeラーニングを取り入れている。合宿講義のため、通常の時間割を利用できないという時間的な制約、個別にテキストを読むときの動機付けのためだ。テキストを読む、理解度を確認する、という手順で学習するため、eラーニングとして6回の小テストを組み込んで

いる。

【参加者からの質問にお答えします】

Q. アカデミックアドバイザーについて教えてください。

A. アカデミックアドバイザーの役割は学生からの学習方法の問い合わせに答えることと、学生の学習状況の把握や指導を行うことです。そのため専門科目、語学、一般教養の3分野から7名が選ばれています。また学習状況の把握・指導としては英語の先生や1年生の基礎実習講義の先生から出欠状況を確認し、出席状況によっては個別に学生に連絡を取り、状況の把握、指導を行っています。

【学生の声】

- ・とにかく成績が答案とともにすぐに戻ってくるのが良い。それによってやる気も増すし、場合によっては、背水の陣でがんばる。
- ・テストの結果が講義の進行中にわかるのが良い。結果がはっきりしていてわかりやすい。
- ・ビジネスゲームはやってみるまでどうしてもわかりにくいものですが、eラーニングで予習することでゲームの理解が速まった。



また、授業では「映像の哲学」、「人間を撮る」という回もあり、映像とメディアというものを、学生の中で対峙させるような講義回も設定しており、学生からの評判は非常に高い。

●学生の出席状況の推移

本講座は、受講希望者過多で抽選となったが、単位とは無関係に受講を希望する学生も発生したため、正規履修者の迷惑にならないことを条件に自主聴講を許可した。授業は原則として出席はとっていない。よって、出席学生数のカウントは、コメントカードの提出者数である。なお、コメントカード提出有無と出欠が無関係であり、

	4/28	5/12	5/19	6/2	6/9	6/16	6/23	6/30
正規(人)	233	235	232	235	220	223	207	213
自主(人)	34	32	29	23	20	25	20	24
合計(人)	267	267	261	268	240	248	227	237

また成績にも影響しないことを周知させているため、コメントカード数は積極的に授業に参加している出席実数であると考えられる。

7月以降は、課題提出や出欠確認のため、普段出席していない層の出席が多く見られたため、実数を表しているとはいいがたく、カウントの対象外とした。これら結果から本講座が出席を取っていないものの、受講者数の急激な低下は発生していないことが分かる。本講座の取り組みが概ね学生に受け入れられ、積極的な授業が構築できたと考えられる。

【シンポジウムに参加して】

非常に有意義な会合であったと思います。

川越にいてはわからない事／会えない先生方とも面識が持てましたことはよかったです。

私が自分の発表の最後のスライド（今後の展望）で示した学部・学科・キャンパスを超えた「学内連携」が、こういったイベント発として実現できるきっかけになればと考えております。

◆早めに講義内容を終わらせる

このことによって、各回の授業後に学生からの質問に回答するようにしている。また、各セメスターの最終講義を丸ごと自習日に当てることも行っている。自習とは銘打ってはいるが、教員も当然講義室に顔を出し、学生の質問を受け付ける。定期試験前の追い込まれた時期だからか自習であっても学生の出席率が高く、一部学生からの質問に黒板を使って答えていると、同じ質問を抱えた学生がどんどん周りに集まり、最終的には二重三重の輪ができあがることもある。「解っていないのに質問しない」「主体的に講義に参加しない」学生には、この様に半強制的な質問タイムを設けることも必要ではなかろうかと思う。

【コメント】 ～今後の講義改善に向けて～

これまで筆者の担当してきた講義は主として70～80人程度の受講生であることが多かった。しかし、この春に行われた生命科学部三学科体制への移行に伴い、筆者の担当講義のうちいくつかは開放科目化され、受講生が240程度という状況も生まれてきている。今後、この状況に適応した新しい講義形態が必要になると考えられ、現在、小テストへのマークシート形式の導入等を試験的にやっているところである。また、授業評価アンケートにおいて「講義のスビ

ードが速すぎてノートを取るのに精一杯」という意見が多々見られる。かといってこれ以上スピードを遅くするわけにもいかず、現在はスライドのコピー（重要部分を白抜きにしたもの）の配付も試験的におこなっているところである。

【学生の声】

- ・たまには授業内容をコピーしたものを配ると助かる。
- ・スクリーン自体ではとてもきれいで良くまとめられていましたが、下部が（前に座っている学生の頭に隠れて）見えにくかったです。かといって前には座りたくないです。
- ・書くことに精一杯で、先生の話聞くことが難しかった。
- ・スクリーンがとても見やすく、参考資料を簡潔にまとめてあってすごくわかりやすかった。
- ・学生の視点もふまえてとても親切に教えてくださってうれしかった。



授業風景

他大学との交流

(平成21年4月～平成22年2月)

教育活動について他大学と学び合うことは、「規範」の無いFD活動を推進する上で、自大学ではどのように取り組んでいくことができるのか、考える際にとても参考になります。

平成21年度、FD推進センターでは以下の3つの交流をもたせていただきました。

●山形大学・高等教育研究企画センター訪問

◇概要

1日目は、FD先端事例の視察・研究として、山形大学高等教育研究企画センターを訪問し、小田隆治教授、杉原真晃准教授、酒井俊典助教より、FD活動の発展経緯、目的・意図、具体的内容、実効性を担保する仕組みなどをヒアリングしました。

2日目は、ヒアリングに基づいて各参加者が感想を述べた後、個別論点についてフリーディスカッションを行いました。

今回は経済学部企画を全学へ周知し、3学部の教員7名と職員3名が参加しました。1日目は別表のとおり山形大学の成功事例を学び、2日目はそれにもとづき本学の教育の課題や問題について討論しました。立場の異なる教職員が自由に意見交換をすることで問題意識の共有が出来、互いに協力すれば出来ることなどが発見される、大変刺激的な機会でした。

東洋大学も他大学に関する研究はまだ必要であると思われます。その際、今回のような「ヒアリング+検討会」「教員+職員」「学部横断的」という形式は、各個人の問題意識や発見を共有化し、ヒアリング内容をより深く理解するうえで極めて有効だと思われます。

◇日 時：平成21年12月9日(火)-2日(水)

◇参加者：山形大学3名、東洋大学10名

<1日目 ヒアリング> 山形大学のFD活動概要

基本的な考え方	主要活動内容
① 授業改善(大学改善)に関わる事項・情報の「公開」と「共有」 「公開」「共有」のための仕掛けや場・機会・雰囲気が重要。 ② 自由な発想・活動のもとでの創発的な 自助努力 改善の直接的強制や、非難・責任追及をそもそも目的としない。 ③ 利用可能資源の有効活用／内部資源の発掘／外部資源の活用 各大学・学部・科目の実情に照らして使える資源を工夫して活用する。 ④ 既成概念の放棄、主体性の確立 FDの目的や方法のいずれについても、実情に照らして独自に検討する。	① 授業評価アンケート 汎用的な質問を全学全科目に一律に実施し、一覧形式で公表する。 定量的で比較・検証可能な基礎資料と位置づける。(→自助努力) ② 公開授業・検討会 ピア・レビューを効かせる仕組み(←自助努力だけでは限界がある) 公式イベントにこだわる必要はない。⇒ミニ公開授業・ミニ検討会 ③ FDワークショップ、FD合宿セミナー 外部講師の講演会+グループ単位の検討・発表(例：シラバスの書き方) ④ 学生参加型授業、学生モニター 学生との意識共有、学生目線からの問題の発見・共有化 ⑤ 地域連携 職員と自治体との共同プロジェクト 県内自治体と連携した体験型学習 ⑥ その他 TIPS冊子・ビデオ作成：授業改善、授業NG、職員活動

<2日目 ヒアリングの整理・ディスカッション> ※東洋大学参加者のみ

主要な論点としては以下のようなものがありました。

- ① 公式／非公式な情報交換・交流の場の必要性
- ② FDワークショップの開催・改善の提案
- ③ 「FDは与えられた形式にはまらず自由で多角的にやってよい」という意識
- ④ 授業評価アンケートについて



●法政大学との意見交換会

◇概要

私立大学のFD担当者が抱えている問題を、共通認識のなかで解決していく情報提供の場とし、双方の大学の活動状況について説明した後、それらについて意見交換を行いました。

昨年度に引き続き第2回の開催ですが、FD先進校の法政大学よりFD活動推進におけるセンターの運営方法、FDハンドブック作成など多くのことを学び、本学のFD活動の参考にさせていただいております。

◇日 時：平成21年10月28日(水) 16:00～17:30

◇参加者：法政大学3名、東洋大学6名

●第1回 関東圏連絡会

同規模大学のFD実務関係者が意見公開をし、共通に抱えているFD関連の問題点改善のための情報収集の場とし、各大学のセンター長(委員長)、事務担当が集まりました。各大学の現状、事例報告を行った後、本連絡会の位置づけ、今後の方針等について話し合いました。

第2回は3月に開催する予定です。

◇日 時：平成21年11月11日(水) 16:00～17:30

◇参加者：青山学院大学、法政大学、立教大学、東洋大学のFD担当者 計11名

学外FD関連研修会レポート

地域科学研究会セミナー

「成績評価の厳格化とGPA活用の進化」に参加して

社会学部社会心理学科 教授 杉山憲司

4講師の話から特に、刺激的であった「評価指標としてのfunctional GPAシステム」半田智久（お茶の水女子大学）と「GPA制度導入後9年を振り返って」大越孝（桜美林大学）を中心に報告する。

半田氏は現行のSABCのletter gradesは成績の質保証になっていないし、学習動機のincentiveにもなっていないとして、1) letter gradesの前段階にある100点満点を活かす、2) 成績に透明性があり、十分説明できる制度として100点満点（絶対評価）と最低到達水準点（合格基準）、具体的には、平均点と2標準偏差によって比例配分することを提案。ショックだったのは、letter gradesと100点満点の成績との間に90%を超える成績の順位攪乱が発生しているとの事実であった。

大越氏の話は、桜美林大学が国際的通用性のあるGPA制度の導入に先だって、大学のミッションとポジションをSWOT分析した上で、1) GPA導入の目的は、履修および学習の適正化と勉学のモチベーションを高めること、2) 導入の前提として、①学習区分制度によるカリキュラムの体系化、②時間割のパターン化（例えば、語学週4回

は1、2時限をタスキがけとして公平を図る）、③アカデミック・アドバイザー制度により学生の履修登録と成績のモニターを実施、3) 1学部からの段階的導入を図った。その結果、GPAは学生が学習効果を自分自身で把握でき、学生の満足度を高め、アカウンタビリティにもなっている。

半田氏の論文は、旧本務校である静岡大学の機関リポジトリに掲載されている。レターグレードの前に100点満点の評価があればの話だが、functional GPAの提案は正しいように思う。また、桜美林の導入例は、導入に先だての諸制度を工夫して導入していることに感心したが、学生による授業評価導入以来、年々教員の成績が甘くなっているとのデータも示された。思わぬ伏兵があるものだと、制度設計の複雑さ、難しさを改めて感じた。他にも、同志社は成績評価を教員の実名入りで、自己点検・評価材料としてWPに公開しているが、その前提には、教育について教員が語り合うことがFDであると考えているようであった。

法政大学第3回FDフォーラム

「学生・職員・教員によるFD改善とは」に参加して

FD推進支援室 木元直子

昨今の高等教育機関では、学生が修得すべき学習成果を明確化することにより、「(教員が)何を教えるか」よりも「(学生が)何ができるようになるか」に力点が置かれている。学生の学士力を養うために、学生・職員・教員が相互協力して課題探求や問題解決能力の育成の取り組みが積極的に行われている。本フォーラムでは、学生をFDに取り込んでいる以下3つの大学が集まり、開催された。

はじめに、立命館大学共通教育推進機構教授・教養教育センター副センター長の木野茂氏から「学生とともに作る授業、学生とともに進めるFD」と題する講演があった。双方型授業における学生の主体的な参画の実践例（大人数授業でディベートを取り入れる、コースツールを利用したディスカッションを促す工夫等）と、その実践コミュニケーション方法による授業効果、またそれらを可能にする教員、学生、職員が相互に協力する仕組みについて話された。

次に、岡山大学教育開発センター教授・FD部門長の橋本勝氏より「岡山大学における学生参画型教育改善」活動の一例として、学生が発案するユニークな授業科目（正科目）の根幹をなす活動の根幹となる学生・教職員教育改善委員会の活動について、講演があった。

この委員会は学生と教職員が同等な位置づけで権限が与えられており、その背景には「学ぶ者の視点を授業改善に積極的に取り入れる」という大学の理念がある。ただし、構成員である学生のうち、半分は意欲的な学生が推薦されている。それは、やる気のある学生も、やる気のない学生も、どのように巻き込んでいくかを重視する点にある。

この視点は、全ての学生が成長して社会に羽ばたけるように大学が支援する上で、大切な考え方なのではないかと思った。

続いて、立命館大学・岡山大学・法政大学の学生FDスタッフより、活動紹介があった。立命館大学の学生FDスタッフからは、授業紹介や研究室を訪問する体験オフィスツアーが紹介された。

最後に、法政大学の社会学部と健康スポーツ学部におけるFD活動の紹介があった。

社会学部では、「すでに学部内で実践され、学部文化、風土となっていることを意識的に共有化、進化することを『FD』にとらえていこう」という共通理解を基礎としている。専任教員による専門演習運営の失敗事例の紹介と分析を冊子として配布したり、卒業生に仕事の現場からの生の話を聞く行事を行っている。健康スポーツ学部では、授業見学ウィーク、授業環境の整備・向上、各種調査の実施・提案、IT活用のガイダンス、スポーツ大会運営（基礎演習の一環）などを行っている。

学外におけるFD行事に参加すると他大学の個性豊かな取組を学べ、刺激的だ。そこで学んだことを日々の業務に還元することは当然である。しかし同時に、一歩外に出ることで、当たり前と思っていた本学の良さも見えてくることは多々ある。日々多忙な業務をこなしている教職員の方々だからこそ、年に1回でもこのような機会を利用していただきたい。

FD推進支援室より

お知らせ

●FD推進委員会委員の交代

経済学部 加賀見 一彰 社会学部 平田 謙次

●学外におけるFD関連研修会への積極的な参加を

FD推進センターでは、本学教職員が学外におけるFD関連の研修会やシンポジウムへ参加することを奨励しております。そのための情報提供とサポートをFD推進支援室がしております。詳細は、FD推進センターのホームページ、またはガールのファイル管理-「FD関連」-「学外FD関連研修会」の様式を見て頂くか、直接お問い合わせください。

●FD関連図書、過去に開催した資料などの閲覧は…

FD推進支援室には、FD関連図書や、過去に本学で開催した資料等のデータなどが保管してあります。ご希望の方はFD推進支援室でご覧になれますので、ご活用ください。



平成21年度 東洋大学FD推進委員会 活動状況報告

平成21年9月～平成22年2月

東洋大学FD推進委員会

◆第2回

- 日時：平成21年12月19日（土）11:30～12:30
 報告1 各学部活動報告
 報告2 他大学との交流について
 審議1 FD推進センターの活動方針について
 協議1 平成22年度新任専任教員研修会の開催について
 協議2 第2回授業改善事例シンポジウム発表者への対応について

○各学部活動報告

研修部会

◆第3回部会

- 日時：平成21年11月21日（土）11:30～12:30
 議題1 平成21年度ティーチング・アシスタントFD（Faculty Development）研修会について
 議題2 平成22年度新任専任教員FD研修会の開催について
 議題3 平成22年度の活動スケジュールについて

◆第4回部会

- 日時：平成22年1月30日（土）10:00～12:00
 議題1 平成22年度大学新任教員事前研修（ウェルカムガイダンス）について
 議題2 平成21年度の研修部会の活動の振り返りと発見された課題について
 議題3 平成22年度の活動計画について

大学院部会

◆第2回部会

- 日時：平成21年10月10日（土）16:10～17:10
 10月17日（土）10:00～11:00
 議題1 21年度各研究科等におけるFD活動の実施状況
 議題2 アカデミック・ハラスメントに関する研修会について

◆第3回部会

- 日時：平成22年2月4日（木）10:00～11:00
 議題1 平成21年度大学院FD活動状況報告会について
 議題2 平成22年度活動スケジュールについて

授業改善対策部会

◆第3回部会

- 日時：平成21年2月22日（月）10:00～12:00
 議題1 平成21年度授業改善対策部会活動報告
 議題2 平成22年度の活動計画について
 議題3 部長会の委嘱について

編集部会

◆第3回部会

- 日時：平成22年2月24日（水）13:00～14:40
 議題1 FDニュース第5号の刊行について
 議題2 FDニュース第6号の刊行について
 議題3 平成22年度の活動計画について

学 内 公 開 活 動

○平成21年度ティーチング・アシスタントFD（Faculty Development）研修会

- 開催日時：平成21年9月28日（月）14:00～16:50
 会場：6101教室（白山キャンパス6号館1階）
 参加対象：平成21年度秋学期採用のTA
 参加人数：122名

<プログラム>

- 開会挨拶（研修部会長・理工学部教授・神田雄一）
- 「FDとTAの役割について」（研修部会長・理工学部教授・神田雄一）
- 「教員の立場からTAへのぞむこと」（経済学部助教・都丸善央）
- TA体験談（文学研究科・町田直子）
（工学研究科・青木隆文）
（経営学部非常勤講師・青木崇）
- 質疑応答
- 総括（大学院部会長・国際地域学部教授・長濱元）
- 閉会挨拶（学長・竹村牧男）

○ティーチング/ラーニングポートフォリオ講演会（後援）

- 開催日時：平成21年10月3日（土）10:00～12:00
 会場：6310教室（白山キャンパス6号館3階）
 参加対象：教職員
 参加人数：30名

<プログラム>

- 開会挨拶（自己点検・評価委員会委員長・杉山憲司）
- 「ティーチング/ラーニングポートフォリオ」（弘前大学・21世紀教育センター高等教育研究開発教授・土持ゲリー法一）
- 質疑応答
- 閉会挨拶（副学長・FD推進センター長・吉田泰彦）

○第2回授業改善事例シンポジウム

- 開催日時：平成21年11月7日（土）13:00～17:00
 会場：6313教室（白山キャンパス6号館3階）

- 参加対象：教職員
 参加人数：50名

<プログラム>

- 挨拶（学長・竹村牧男）
- 事例発表
- 討論会
- 総括（教務部長・小椋康宏）

○アカデミック・ハラスメント研修会

- 開催日時：平成21年11月21日（土）13:30～15:30
 会場：6312教室（白山キャンパス6号館3階）
 参加対象：教職員・大学院生
 参加人数：30名

<プログラム>

- 挨拶（学長・竹村牧男）
- 「アカデミック・ハラスメントのない大学づくり」（奈良県立医科大学講師・御興久美子氏）
- 質疑応答

○平成21年度 学部FD活動状況報告会・FD講演会

- 開催日時：平成21年12月19日（土）13:00～17:30
 会場：6313教室（白山キャンパス6号館3階）
 参加対象：教職員
 参加人数：約120名

<報告会プログラム>

- 挨拶（学長・竹村牧男）
- 第I部 学部FD活動状況報告会（学部長）
- 第II部 基調講演「FD・SDのあり方を考えるー学士課程教育構築の要請のもとでー」（学校法人立教学院本部調査役、東京大学名誉教授、桜美林大学名誉教授、大学教育学会前会長、教育学博士・寺崎昌男）
- 質疑応答・討論会
- 総括（副学長・佐々木啓介）

平成22年度東洋大学FD推進委員会 活動計画

平成22年3月～

○平成21年度大学院FD活動状況報告会・FD講演会

○平成22年度大学新任教員事前研修（ウェルカムガイダンス）

東洋大学の教育理念・研究活動方針、FDへの取組、井上円とと東洋大学、研究活動助成、大学生の心の理解と配慮の仕方など

○第3回授業改善事例シンポジウム



東洋大学FDニュース 第5号

発行：東洋大学FD推進センター
 発行日：平成22年3月12日
 〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20
 電話 03-3945-7253 FAX 03-3945-7395
 E-mail mlfdshien@ml.toyonet.toyo.ac.jp
 URL http://www.toyo.ac.jp/fd/index_i.html



東洋大学は平成24年(2012)年に創立125周年を迎えます



東洋大学は平成19年度に勸学社基準協会による大学評価（認証評価）を受け、「大学基準に適合している」と認定を受けました。この認定マークは、大学が常に自己点検・評価に取り組んでいること、そして社会に対して大学の質を保証していることのシンボルとなるものです。